

私にとって器用とは

森 下 一 期

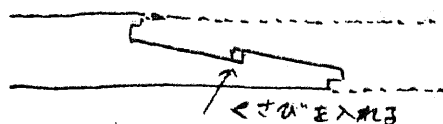
作ることが好き、自分なりにうまくいった。
その思いが自分を器用に思わせている。

今回の特集を話題にした常任委員会で「器用だと思ふ人、書きませんか」と話が出ました。つい、我を省みず名乗り出てしまいました。少しばかり器用ではないかと思っていたからです。そんなことから、自分の手づくりの足跡を振り返ってみました。

手労研の結成に参加し、今まで続けているのは何故だろうと考えてみると、自分は作るのが好きだからだろうなと思います。遊び道具の類から、大きなものでは数坪の建物まで数多く浮かんできます。左手の古傷の一つ一つに刃物と格闘していた作品が二重写しになってきます。小銃の薬きょう（保安隊の演習場に忍び込んで拾ってきた）を使って鉄砲をつくっていたときに親指の内側にナイフの刃が食い込んでしまいました。彫刻刀が滑って手のひらに食い込み血が吹き出たこともあります。竹を裂いて切ったこともあります。こんなに怪我をしているのですから、失敗も多かったのですが、これはやりきったという思いも強く残っています。

高校2年生のときには棟梁格で生徒会の取り組みとして部室を作りました。地理の先生が自分の家を造っていると授業中に話していたのがきっかけです。その先生の教えを受けながら、学校から材料費を引き出し数カ月で取り組みました。柱を組み合わ

せた透視図による図面をかき、黒羅紗紙に白インクで印刷して全校に配りました（ガリ版を切ったのはそれが得意な仲間でした）。今も手元にあります。各クラスから要員を出してもらって技術指導をしたものです。かんなのかけ方、のみの使い方をいい気になって教えていました。建て前は全校生徒の前で盛大にやりました。中でも印象に残っているのは柱のような角材を継ぐ加工です。建物の桁の長い部分は継がなければなりません。これはほとんど自分でやったのですが、図のように加工して継ぐのです。それを仕上げで2本が見事にはまったときには我ながら良くできたものだと感心したものです。



30も過ぎてから職業訓練校にいて木材加工の実習を学んだことがあります。まとめの作品は機械を使わず、手工具で小物ケースを作りました。天井の板と側の板は組み手といって互いに歯のように出して組み合わせるのですが、隙間もなくできあがりました。5段ある引き出しの一つを押し込むと、他の段が前に出るような感じになりました。そのくらい隙間のないものに仕上げることができました。つい自慢もしたく

なり、誰彼なく見せて回ったように思います。見せられた方は迷惑だったかもしれません。

私の場合は、作ることが好きだったことと、自分なりにうまくいったという思いが重なっているようです。ということは好きで何回も繰り返していたからうまくいくようになったということかもしれません。道具類を使っているとき、刃物や材料の特徴をつかみ、それに合わせて加工しようとしています。でも、失敗することもよくあります。見込みが狂ってしまうのです。誰か見ているときにはあわてて何故失敗したか言い訳をしたくなります。どうやら、私の場合、うまくいくとは道具と材料を把握し、結果を予測し、それに近くできたときと言えるでしょう。ですから、線もなしに真っ直ぐ切るとか、直角に切ることはあまりうまくできません。つまり、動作が自動化されていて考えずともうまくいくということではないようです。

そう思って、金槌やハンマーを振る時を考えてみると、的確に当たるということはありません。よくはずすし、時に自分の手を打つこともあります。そういったことではあまり器用ではありません。そういえば、字も下手です。もっぱらワープロに頼っているのはそのせいです。字の上手な人は自分の字に快さを感じているのでしょうか。また、私はスポーツも得意ではありません。

このように考えてみると、器用さとはある意味でその人の個性かもしれません。器用な部分と不器用な部分とがあるのではないのでしょうか。何でもできるように見える人もいますが、案外できないところがある

かもしれません。逆に何につけ不器用だと思っている人も他の人から見るとすごいと思うものがあるものです。

したがって、私が器用だと思ってきたのは、ごくごく限られた分野です。それも一つ一つを丁寧に見たり、あわせたりするというもののようです。改めて考えてみるとこういうものは器用なのかどうかわかりにくくなります。

そうやって考えていたら、ある経験を思い出しました。私はナイフを研いだり、包丁を研ぐことは比較的得意でした。のみやきりだしナイフの切れ刃（ぴかぴか光っている斜めの部分）が丸くならず、かなり平らに研ぐことができたからです。手をしっかり押さえ丁寧に研ぐよう心がけていました。とはいえ、職人さんのようにはいかず、気が抜けない思いをしていました。そんなある時、大学生に研ぎを教えていて驚かされました。そんなに経験のないある学生が驚くほど見事に平らな面を出しているのです。一目見て私以上だなと感じました。そして、彼の研ぎ方をみると、やはり特徴があります。砥石に刃を当てる方向が違うのです。そのようにしてみると、私も以前よりも気軽に同じような平らな面を出すことができました。なるほどと思ったものです。

器用さは天性によるだけでなく、闇雲に練習するのでもなく、合理的な方法を身につけることなのではないかと思った次第です。そう考えると誰でもが器用になることができるのではないのでしょうか。他の人との比較もありますが、自分でうまくいったと思った時に器用になっているように感じます。